

# 砂糖きび栽培地と砂糖生産地の変遷について

川 端 実 美

## 目 次

1. はじめに
2. 砂糖きびの原産地
3. 砂糖の効能（機能）
4. 砂糖きび栽培と過酷な労働
5. 砂糖きび栽培地と砂糖生産地
6. 砂糖きび栽培と砂糖生産の労働力
7. おわりに

## 1. はじめに

スーパーなどの店頭で陳列されている砂糖を色彩的に見てみると、白色、黄色、黄褐色（黒色）の3種類に大別できる。特に、白色の砂糖はとてつもなく白くて神秘的である。また、砂糖はとても甘く、最近では砂糖を摂り過ぎると糖尿病になるとか肥満になるとか成人病の原因として取り沙汰されているが、これは現代人にとって砂糖が身近な食材になり誰もが簡単に手に入れることができるようになったことを物語っている。

このような砂糖について、特に、砂糖きび中心に砂糖きび栽培と砂糖生産地の変遷や砂糖農園（砂糖プランテーション）の労働力（労働者）について述べていくことにしよう。

本稿ではヨーロッパで最初に栽培されるようになった甜菜については触れていない。また、砂糖きび栽培地や砂糖生産地（植民地）とイギリスなどの植民地本国との経済関係についても詳しく言及していないし、砂糖の生産量などについても同じである。さらに、ヨーロッパとアフリカやカリブ海など

を結ぶルートで行なわれた三角貿易についても説明していない。これらについては次稿の課題としたい。

## 2. 砂糖きびの原産地

砂糖きびの原産地として南太平洋地域<sup>(1)</sup>のインドネシア<sup>(2)</sup>や「ニューギニアの東に浮かぶニューブリテン島<sup>(3)</sup>」、あるいは「ソロモン諸島やイースター島<sup>(4)</sup>」などが挙げられているがはっきりと特定することは難しい。ただ、それらの地域や島々に砂糖きびと人類の誕生との関わりについての伝説や物語<sup>(5)</sup>が残っていることから砂糖きびの原産地が南太平洋地域のどこかであることは確かである。

## 3. 砂糖の効能（機能）

砂糖の効能（機能）としてアメリカの歴史人類学者であるシドニー・ミンツは次の5つを挙げている<sup>(6)</sup>。

初めに、薬品としての砂糖である。紀元前3世紀の医学書に砂糖は「精力増進、熱冷まし、整腸などに効能があり<sup>(7)</sup>」、また、「身体の弱い人や負傷している人に有効である<sup>(8)</sup>」と書かれている。

さらに、16世紀のヨーロッパのある医学書によれば、「胸、肺、のどの病

---

(1) 布留川正博「砂糖産業の西漸運動と黒人奴隷制の成立—「新世界」における奴隷制砂糖プランテーションの歴史的前提—」『同志社大学経済学論叢第39巻第3号』同志社大学経済学会、1988年3月、p 194. 12~13。

(2) 川北稔『砂糖の世界史』岩波書店、1998年、p 13. 5~6。

(3) 池本幸三・布留川正博・下山晃『近代世界と奴隷制 大西洋システムの中で』人文書院、1995年、p 86. 1~3。

(4) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 86. 1~3。

(5) 布留川正博、前掲書、p 194. 15~21。

池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 86. 4~9。

(6) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 288. 1~2。

(7) 布留川正博、前掲書、p 195. 19~21。

(8) 布留川正博、前掲書、p 195. 19~21。

気に効果があり、『粉状にすると眼にも効くし、気化させれば風邪一般に効く。…老人の強壯剤にもなる<sup>(9)</sup>』と砂糖の用法が具体的に述べられている。「バラの花の砂糖漬け」は結核の解熱剤として使われていた<sup>(10)</sup>。12世紀のイタリアの大神学者で『神学大全』を書いたトマス・アクィナスは「キリスト教で決められている断食の日に、砂糖を口にすると戒律違反になるのかどうか<sup>(11)</sup>」の論争の中で、「砂糖は食品ではなく、消化促進などの薬品であるから、たとえ、『くすり』である砂糖を飲んでも、断食を破ったことにはならない<sup>(12)</sup>」と結論づけし、砂糖が薬品であることを世間に公表した。

砂糖は「デコレーションの素材として<sup>(13)</sup>」使われた。王室や貴族がパーティを開くときに砂糖菓子でできたデコレーションを『『細工物』として展示<sup>(14)</sup>』した。当時の砂糖は供給量が極端に少なかったために非常に高価で王室や富裕な貴族などしか手に入れることしかできなかった。そこで、王室や富裕な貴族達は自分達の権力や威厳を誇示するために砂糖菓子でできたデコレーションをパーティに参加した人達に見せびらかしたのである。つまり、彼らにとって砂糖菓子でできたデコレーションは権力や威厳を示すステイタスシンボルだった<sup>(15)</sup>のである。

砂糖はまたヨーロッパに輸入され使用された東南アジア原産の「胡椒、ナツメグ、ジンジャーなどの香料<sup>(16)</sup>」と同じように調味料として使用された。

砂糖の使用量によって甘味料としての役割を果たすこともあった<sup>(17)</sup>。

さらに、冷蔵庫などが無い当時、胡椒と同じように肉などを保存する時に使われた。

---

(9) 川北稔、前掲書、p 66. 9～11。

(10) 川北稔、前掲書、p 63. 8～9。

(11) 川北稔、前掲書、p 65. 2～6。

(12) 川北稔、前掲書、p 65. 2～6。

(13) 川北稔、前掲書、p 68. 1。

(14) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 288. 13～14。

(15) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 288. 14～p 289. 4。

(16) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 288. 9。

(17) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 288. 12。

#### 4. 砂糖きび栽培と過酷な労働

砂糖きびの栽培には豊富な水と適度な温度が必要である<sup>(18)</sup>。砂糖きびが収穫されるまでに成長するのに14～18ヶ月かかる<sup>(19)</sup>。5～6月に作業が開始され、12～1月の雨季に穴を掘り、そこに苗木が植えつけられ、成長度に応じて施肥され、砂糖きびの成長をじゃまする草が取り除かれた。1～5、6月の乾季になって収穫された。砂糖きび栽培は原始的な方法で行なわれ、過酷で肉体的な労働に依存していた。

このような砂糖きびの栽培は土壌を急激に枯渇する。そこで、土壌の消耗を防ぐために「軽くて柔らかく底の深い<sup>(20)</sup>」土壌が使用され、羊やらばなどの糞や尿が肥料として使用された。また、灌漑施設が建設され「ある一定の期間ごとに畑に水を引<sup>(21)</sup>」くこともあった。

砂糖きびは収穫後、根を残し「新芽を出させ<sup>(22)</sup>」るラトーン法で栽培する方法が一般的であったが、この方法は確かに何回も収穫できるが、その反面、土壌を消耗させるので「生育が悪くなり<sup>(23)</sup>」砂糖の成分は徐々に減少していった<sup>(24)</sup>。

砂糖きびから砂糖を生産する製糖工程として圧搾や煮沸・凝固、精糖工程がある。それらの工程は屋外の炎天下で行なわれたり屋内で行われたが火を使うことが多いため、作業場は異常な高温となり「湿度も非常に高く<sup>(25)</sup>」、そこでの作業は労働者に心身ともに大きなダメージを与えた。特に、ボイ

---

(18) 川北稔、前掲書、p 15. 7。

布留川正博、前掲書、p 206. 6。

(19) 布留川正博、前掲書、p 206. 6。

池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 181. 10。

(20) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 181. 8。

(21) 布留川正博、前掲書、p 207. 9。

(22) 布留川正博、前掲書、p 207. 12。

(23) 布留川正博、前掲書、p 207. 14～15。

(24) 布留川正博、前掲書、p 207. 14～15。

(25) ヘンリー・ボブハウス著、阿部三樹夫・森仁史訳「砂糖」『歴史を変えた種』パーソナルメディア、1987年、p 103. 4。

ラー室での作業は悲惨であった。そのような劣悪な環境の中でアフリカから強制的に連れてこられた黒人が原住民や白人などよりは過酷な重労働に適していると考えられ導入されたのである。

## 5. 砂糖きび栽培地と砂糖生産地

砂糖きびは南太平洋地域からインドに伝わった。砂糖きびについての初めての記述が紀元前1000年頃インドの「文字の記録のアタルヴァ・ヴェーダの中<sup>(26)</sup>」にある。また、砂糖きびから砂糖を生産する方法や砂糖製造工場についても仏教の経典に記載されている<sup>(27)</sup>。

さらに、砂糖きびの栽培と砂糖の生産方法はインドからペルシアに6世紀頃伝えられた。そこで10世紀から12世紀にかけて砂糖きびの栽培と砂糖の生産方法が発達し、「インダス川の西方にあるマクラーン地域（現在のパキスタンとイラン国境海岸地域）とチグリスユーフラテス川流域<sup>(28)</sup>」で展開された。

砂糖きびはシリアやパレスティナなどの中近東の地域で栽培され、キプロスやロードス、そしてクレタやマルタ、シチリアなどの地中海東部の島々やエジプトやスペイン南部に伝わった。シチリア島では砂糖きびの栽培と砂糖の生産は「10世紀半ばころまでに<sup>(29)</sup>」この島の経済活動に重要な役割を果たした。また、キプロス島では「南部の海岸地帯を中心に<sup>(30)</sup>」砂糖きびが栽培され、砂糖が生産された。「14世紀後半以降<sup>(31)</sup>」この島の砂糖産業はピークを迎えた。エジプトにおいては「ナイル川流域を中心にしてアレクサンドリアから南部アスワンまで<sup>(32)</sup>」の地域で砂糖きびが栽培され砂糖が生産されて

(26) 布留川正博、前掲書、p 195. 6~7。

(27) 布留川正博、前掲書、p 195. 13~15。

(28) 布留川正博、前掲書、p 196. 2~4。

(29) 布留川正博、前掲書、p 197. 12。

(30) 布留川正博、前掲書、p 201. 5。

(31) 布留川正博、前掲書、p 201. 8。

(32) 布留川正博、前掲書、p 197. 8~9。

いた。

次に、15世紀末頃に砂糖きびの栽培と砂糖の生産方法は現在のポルトガルの大西洋の沖にあり、モロッコの首都であるカサブランカの西方に浮かんでいるマデイラ諸島やカナリア諸島、あるいはギニア湾のサン・トメ島に伝わった。マデイラ諸島の砂糖産業は「ポルトガル人が入植を始めた直後の1420年代<sup>(33)</sup>」に地中海地域から導入された。マデイラ諸島はポルトガル人を中心とするヨーロッパ人の対外進出の拠点であり、15世紀半ば頃エンリケ航海王の後押しを得てこの諸島の砂糖産業は急速に発展した。また、カナリア諸島の砂糖産業は1479年のアルコソウ<sup>ア</sup>ス条約でカナリア諸島がカスティリアの植民地になってから本格化した。ゴメラ島やパルマ島、そしてグラン・カナリア島やテネリッフェにおいても盛んであった。ギニア湾のサン・トメ島では1490年代に「マデイラ諸島から砂糖製造技師が送り込まれ<sup>(34)</sup>」砂糖産業は「急速に発展した<sup>(35)</sup>」。

カリブ海で砂糖きび栽培が開始されたのはスペインが新大陸を発見してからである。砂糖きびはバルバドス島やジャマイカ、あるいはキューバやエスパニョーラ島、さらにはブラジルで栽培され砂糖が生産された。

バルバドス島に砂糖きびが初めて植えられたのは1637年である。それまでこの島にはほとんど人が住んでいなかった。バルバドス島は、「水が豊富で大量の森林があ<sup>(36)</sup>」り、「比較的天候に恵まれ<sup>(37)</sup>」た島であった。砂糖きびの栽培が進むにつれ、特に、この島の南側の海岸線に沿って砂糖きびのプランテーションが展開されていた。そして、1660～1670年になると当時で「業界で最大の砂糖生産地<sup>(38)</sup>」になった。しかし、森林は大量に伐採され、土壌は極端に消耗した。

---

(33) 布留川正博、前掲書、p 211. 14～15。

池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 51. 5。

(34) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 53. 13～14。

(35) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 53. 13～14。

(36) ヘンリー・ボブハウス、前掲書、p 100. 3～4。

(37) ヘンリー・ボブハウス、前掲書、p 100. 3。

(38) ヘンリー・ボブハウス、前掲書、100. 7。

ジャマイカは「面積が広く耕地に恵まれ<sup>(39)</sup>」「新開地で地味が涸渇していない<sup>(40)</sup>」ためその土地を利用して砂糖きびが栽培され、17世紀の後半にはバルバドス島に代わり世界で最も砂糖を生産する島となった。

現在、ドミニカ共和国が3分2、ハイチが3分の1を占めているエスパニョーラ島（スペイン読み、フランス読みではサン・ドマング島）は1493年に「コロンブスによって<sup>(41)</sup>」「砂糖きびの苗木がもたらされ<sup>(42)</sup>」砂糖が生産されるようになった。1804年にはこの島の西部に「西半球で最初の黒人の独立国ハイチ<sup>(43)</sup>」が誕生した。

ところが、マルチニーク島とグアドループ島で砂糖きびが栽培され砂糖が安く生産されるようになると「ジャマイカなどイギリス領の島<sup>(44)</sup>」々は打撃を受けた。

砂糖きびは「中南米に到達してから<sup>(45)</sup>」「スペイン領のカリブ海のいくつかの島でつくられ<sup>(46)</sup>」てブラジルに導入され、「16世紀から17世紀前半にかけて<sup>(47)</sup>」ブラジルは「世界最大の砂糖生産地<sup>(48)</sup>」となった。特に、1630年頃のブラジルの北東部では「137の製糖工場が稼動<sup>(49)</sup>」しており、1工場当たりの生産量はマデイラ諸島の約4倍であった。しかし、17世紀後半から18世紀頃になると「世界最大の砂糖生産地<sup>(50)</sup>」としての地位をカリブ海の他の島々に譲り渡した。

---

(39) 川北稔「西インド諸島の富—成立と崩壊—」『工業化の歴史的 premise—帝国とジェントルマン—』岩波書店、1983年、p. 153. 4~5。

(40) 川北稔『工業化の歴史的 premise』p 153. 5。

(41) 歴史学研究会『南北アメリカの500年 2近代化の分かれ道』青木書店、1993年、p 243. 5~6。

(42) 歴史学研究会、前掲書、p 243. 5~6。

(43) 川北稔、前掲書、p 147. 13。

(44) 川北稔、前掲書、p 102. 11。

(45) 川北稔、前掲書、p 28. 14~p 29. 1。

(46) 川北稔、前掲書、p 28. 14~p 29. 1。

(47) 布留川正博、前掲書、p 193. 7~8。

(48) 布留川正博、前掲書、p 193. 7~8。

(49) 布留川正博、前掲書、p 220. 17。

(50) 布留川正博、前掲書、p 193. 8。

1520年頃エスパニョーラ島からキューバに砂糖の苗木が移植された。キューバはカリブ海の島では最大で土地は肥沃で、砂糖生産に必要な燃料や森林資源が豊富であり、「当時の動力源であった牧畜業に恵まれて<sup>(51)</sup>」おり、砂糖きびの栽培と砂糖の生産に最適な島であった。1783年になるとキューバはイギリスの支配から開放されたアメリカ13州と密接に関係が深まり、キューバにとってアメリカの13州は「最良の市場<sup>(52)</sup>」となり、「キューバ糖に対する米国の需要<sup>(53)</sup>」が増大し、キューバの砂糖きびの栽培と砂糖生産は飛躍的に拡大した。第一次独立戦争時においては戦争はキューバの東部と中部で行なわれ、戦争による被害はその範囲に限られた。しかし、第二次独立戦争は第一次独立戦争と違い、戦火は「キューバ全土<sup>(54)</sup>」に及び、キューバの「砂糖経済の受けた損害ははかり知れなかった<sup>(55)</sup>」。20世紀になるとアメリカからの直接投資がキューバの中部や東部中心に行なわれ、第二次独立戦争によって受けた甚大な被害を修復し、キューバの砂糖経済は「急速に復興<sup>(56)</sup>」・発展した。

## 6. 砂糖きび栽培と砂糖生産の労働力

砂糖きびは南太平洋のある地域からインドに伝わり、そこで砂糖を精製する方法が生まれ、6世紀頃ペルシアに砂糖きびの栽培と砂糖生産方法が伝えられたが、どのような人達が砂糖きびの栽培と砂糖の生産に従事していたかははっきりしていない。しかし、いろいろなタイプの奴隷達が働いていたことは考えられる。

イスラム世界では奴隷は「主人の身の回りの世話をしたり、家の仕事をし

---

(51) 歴史学研究会、前掲書、p 245. 7。

(52) 歴史学研究会、前掲書、p 248. 13。

(53) 歴史学研究会、前掲書、p 248. 13。

(54) 歴史学研究会、前掲書、p 264. 4。

(55) 歴史学研究会、前掲書、p 264. 5。

(56) 歴史学研究会、前掲書、p 264. 15。



たりする家内奴隷<sup>(57)</sup>」が主であり、他に、「宮廷のハレムの女奴隷やその護衛や雑務を行なう宦官奴隷<sup>(58)</sup>」奴隷兵士もいたが、砂糖きびの栽培や砂糖の生産にはあまり使用されていなかった。

キプロス、ロードス、クレタやマルタ、シチリアなどの地中海東部の島々の砂糖農園で働いていた黒人奴隷は人数的に少数であった。「イベリア半島や北アフリカからのムスリム奴隷<sup>(59)</sup>」、黒海周辺から連れてこられた「タタール、チェルケス、ロシア人などの奴隷<sup>(60)</sup>」、「バルカン半島からはギリシア、アルメニア、アルバニア人などの奴隷<sup>(61)</sup>」、グアンチェ族などの奴隷が働いていた。

エジプトにおいては1000～1350年頃王家が精糖業を独占し、大量にヌビア人奴隷が使用されていた。

スペイン南部では「イスラ教徒に対するレコンキスタの過程で捕らえられたムスリム奴隷<sup>(62)</sup>」やポルトガル人がカディスやセルビアに黒人奴隷を輸入することによってもたらされた奴隷などが砂糖農園で働いていた。

カナリア諸島では先住民のグアンチェ族が砂糖きびの栽培や砂糖生産の労働力として使用された。

マデイラ諸島においては1425年以降ポルトガルの植民地だったこともあり、最初は砂糖農園で「本国から一種の強制労働として連れてこられた<sup>(63)</sup>」「囚人や負債者やキリスト教への改宗を拒んだ頑固なユダヤ人<sup>(64)</sup>」などが多数（1,000人以上）労働者として働いていたが、主はカナリア諸島から導入された先住民のグアンチェ族が砂糖農園の労働者であった。ところが、15世紀の末頃になると、ヨーロッパ人が持ち込んだ病気や農作業における酷使のた

(57) 布留川正博、前掲書、p 198. 10～11。

(58) 布留川正博、前掲書、p 198. 11～13。

(59) 布留川正博、前掲書、p 205. 19～25。

(60) 布留川正博、前掲書、p 205. 19～25。

(61) 布留川正博、前掲書、p 205. 19～25。

(62) 布留川正博、前掲書、p 205. 7～8。

(63) ヘンリー・ポプハウス、前掲書、p 87. 13。

(64) ヘンリー・ポプハウス、前掲書、p 87. 14。

め徐々にグアンチェ族の人口が激減し労働力不足に陥った。そこで、グアンチェ族に代わる労働力が模索された。当時はポルトガル人によって大西洋黒人奴隷貿易が確立されていた頃であり、また、マデイラ諸島がアフリカの「ベニンやコンゴから連行された奴隷の集積地<sup>(65)</sup>」であったことからアフリカの黒人奴隷をグアンチェ族の代替労働力として容易に確保することができた。ちなみに、16世紀初めのマデイラ諸島の人口を見てみると、全体で15,000人から18,000人の人々が住んでいたが、そのうち白人とムラートがそれぞれ約600人で黒人奴隷は約2,000人であった。また、輸送途上の黒人奴隷も5,000~6,000人いた<sup>(66)</sup>と言われている。

ところで、黒人奴隷はアフリカのどの地域から世界奴隷貿易のルートを通じて大西洋やカリブ海に連行されていったのであろうか。黒人奴隷はアフリカ西岸の上ギニアや下ギニアの地域から連れてこられた。原住民の首長がわざと戦争をしかけ捕虜を獲得し彼等を売って利益を得る形で奴隷になる者が多かった。例えば、ベニン王国の場合、国全体で奴隷狩りをし、獲得した奴隷をヨーロッパに売って大きな利益を得ている代表的な国であった。黒人は一旦、ギニア湾東部にあるサン・トメ島に陸揚げされ大西洋やカリブ海の島々に連行されて行った。

サン・トメ島はマデイラ諸島と同じように「ベニンやコンゴから連行された奴隷の集積地<sup>(67)</sup>」であったことから労働力の確保は容易であり、砂糖農園の労働力の大半は黒人奴隷であった。

バルバドス島においては1627年に2,000人の白人奉公人が砂糖農園の労働力として導入された。その後、「砂糖を安価な黒人奴隷を利用して耕作し精糖することが一番大きな利益に結びつくことが<sup>(68)</sup>」判明し、黒人奴隷が導入され砂糖農園で働くようになった。1640年には黒人奴隷は1,000人もいなかったが5年後には5,000人になった。さらに、35年後の1680年には4万

(65) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 53. 15。

(66) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 53. 4~18。

(67) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 53. 15。

(68) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 178. 2~3。

6,000人の黒人奴隷がいた。一方、白人の人口は1645年の4万人から1680年には2万人に減少した<sup>(69)</sup>。このようなバルバドス島の人口の推移からこの島においても砂糖農園の主な労働力は黒人奴隷だったことがわかる。

スペイン領であったジャマイカには最初先住民のアラワク族やカリベ族が住んでいたが、17世紀後半頃になると「スペイン人が持ち込んだ病気や苛酷な取扱でほとんど死滅<sup>(70)</sup>」状態になった。このような事情から砂糖農園で働くカリベ族などの先住民は減少していった。ジャマイカは1675年頃くらいから砂糖と奴隷貿易が盛んになり、1720年代になると砂糖産業はバルバドス島のそれを凌駕するようになった。17世紀の後半から18世紀の前半かけてのジャマイカの砂糖農園で働いていた労働者はジャマイカが「奴隷貿易の大集散地<sup>(71)</sup>」であったことから得られた黒人奴隷達であった。

1520年頃、キューバは「砂糖きびの苗木がエスパニョーラ島から移植され<sup>(72)</sup>」砂糖きびの栽培が始まった。この島は自然条件的に数多くある他のカリブ海に浮かんでいる島々と比較して最も砂糖きびの栽培に適していた。しかし、スペイン本国の外貨獲得の手段として「金鉱を中心とした貴金属採掘<sup>(73)</sup>」を最優先する植民地政策のため砂糖きびの栽培と砂糖の生産は思うように進まなかった。金などの採掘には先住民（カリベ族）が使用されたが過酷な労働のため彼等の人口は激減した。砂糖農園では先住民だけでなく様々な人達が働いていたが先住民の人口の減少のためその「代替労働としてアフリカから黒人奴隷が輸入され<sup>(74)</sup>」るようになった。18世紀末頃になると黒人奴隷を主な労働力にしてキューバの砂糖経済は急速に発展し始めた。その発展の契機となったのはフランスからの独立を求めて起こった反乱によるハイチの砂糖生産の壊滅的な打撃であった。この壊滅的な打撃により砂糖の国際

(69) 角山栄・川北稔『講座西洋経済史 I 工業化の始動』同文館、1983年、p 212. 16～20。

(70) 川北稔、前掲書、p 34. 5。

(71) ヘンリー・ボブハウス、前掲書、p 113. 5。

(72) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 244. 16～p 245. 1。

(73) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 245. 10。

(74) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 245. 16。

価格が上昇し、利益を得るためにフランスの商人達はハイチでの農園経営を回避しキューバに方向転換した。その結果、キューバの砂糖経済は急速に発展した。また、もう一つの契機は1783年のアメリカのイギリスからの独立によるキューバ糖に対する需要の増大である。アメリカはキューバにとって最大の市場であった。

先住民の代替労働力としてアフリカから輸入された黒人奴隷の輸入状況を見てみると、1512年から1763年までの251年間に6万人であったものが、その後の1865年に奴隷貿易が廃止されるまでの102年間に46万7,828人の黒人奴隷が輸入された<sup>(75)</sup>。この黒人奴隷の輸入増加とキューバの砂糖経済の発展は比例している。

キューバはもともと「牧畜業やタバコ栽培業で奴隷主が奴隷と<sup>(76)</sup>」一緒に働く家父長制的奴隷制度が支配的な国であった。また、「首都ハバナを中心とする都市においては家内奴隷制度が一般的であり、奴隷達は御者や召し使いなどの仕事に従事していた<sup>(77)</sup>」。このようなキューバの奴隷制度は次のような要因により急速に崩壊していった。一つはデンマークやアメリカ、スウェーデンやラテンアメリカ諸国などが次から次へと奴隷貿易を廃止していったため、今までのような奴隷輸入が難しくなったからである。もう一つは契約労働者の雇用の増大である。契約労働者の雇用の増大は「砂糖経済の近代化を労働面において」推し進めた。契約労働者の排出地域はアジアでは中国、ヨーロッパではスペインやカナリア諸島、ラテンアメリカではハイチやドミニカ共和国、ジャマイカやメキシコなどである。特に、その中で中国人苦力が圧倒的に多く、1847年から1874年の27年間に約50万人の中国人苦力がアメリカやヨーロッパの各植民地に移住したが、そのうち約12万人がキューバの砂糖農園で働いていたと言われている。彼等は過酷な労働を強いられ繁忙期のサラ期には15時間以上も働かされていた。また、粗末なバラコ

(75) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 246. 表3-9 キューバへの奴隷輸入数から算出。

(76) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 246. 17~18。

(77) 池本幸三・布留川正博・下山晃、前掲書、p 246. 18~p 247. 1。

ン住まいで黒人と同じ食事を取らされるなど全く黒人奴隷と同じ境遇かそれ以下であったとも言われている。

ブラジルは1500年にポルトガル人ペドロ・アルヴァレス・カブラルによって発見されたことによりポルトガル領となった。1580年にポルトガルがスペインに併合され一時期スペイン領になったが、1640年にポルトガルがスペインから独立し再びポルトガル領となった。

スペイン領のカリブ海の島々で栽培された砂糖きびは後にブラジルに移入・栽培されるようになり、大規模な砂糖農園が展開された。そのような砂糖農園で働く最初の頃の労働者は原住民のインディオであったが、労働力は不足していた。そこで、ヨーロッパからの年季奉公人（白人労働者）が使用されるようになった。1570年代以降からはポルトガルの奴隷貿易を通じて得たアフリカからの大量の黒人奴隷が大規模な砂糖農園の主たる労働者となった。ブラジルの北東部沿岸は砂糖きび栽培が盛んになり、17世紀末までには砂糖市場はブラジル産で占められるようになり砂糖産業は大きな発展を遂げた。

## 7. おわりに

今まで砂糖きびの栽培地と砂糖生産地の変遷や砂糖農園でどのような人達が働いていたかを述べてきたが、次のようにまとめることができよう。

砂糖きびは南太平洋のある地域を原産地とし、インドに伝わり、そこで砂糖生産方法が発達し、ペルシアやエジプトを経て地中海の島々に伝播した。そして、大西洋に浮かぶ島々に伝わり、カリブ海の島々を最終的なゴールとした。

このような状況を布留川正博氏はエリック・ウィリアムズ氏の主張を踏まえて、次から次へとバトンを渡して競技を進めていく400メートルリレー競争や800メートルリレー競争などに例えて説明し、「砂糖の西漸運動<sup>(78)</sup>」と呼

(78) 布留川正博、前掲書、p 192. 6～p 193. 22。

んでいる。

砂糖きび栽培地と砂糖生産地の変遷の過程をよくみてみると、前の砂糖きびの栽培地や砂糖生産地を壊滅状態に陥れ、破壊し、次の新しい場所に生産拠点を移していったと言えよう。

次に、砂糖きびの栽培地や砂糖生産工場の労働力として、初めは原住民(先住民)が働き手として利用されたり、ヨーロッパなどからの年季奉公人などが使用されたりしていたがすぐに労働力不足なり、その代替労働力としてアフリカから強制的に連れてこられた黒人奴隷が導入され、劣悪な環境の下で働かされていたのである。まさしく、過酷な労働を強いられた黒人奴隷は労働力の面で当時の砂糖経済を根底から支えていたと言えるであろう。

#### (主要参考文献)

- ・角山栄『茶の世界史 緑茶の文化と紅茶の社会』中央公論社、1997年。
- ・川北稔「煙草と砂糖」『工業化の歴史的前提—帝国とジェントルマン—』岩波書店、1983年。
- ・池本幸三『近代世界における労働と移住』阿吽舎、1996年。
- ・長野敏一『英国経済空間の探求 海からの経済史論』文眞堂、1985年。
- ・S. B. ソウル著、堀晋作・西村閑訳『世界貿易の構造とイギリス経済』法政大学出版局、1974年。
- ・堺憲一『あなたが歴史と出会うとき—経済の視点から』名古屋大学出版会、2003年。
- ・角山栄『図説経済学体系8 新版 西洋経済史』学文社、1996年。
- ・矢口孝次郎『イギリス帝国経済史の研究』東洋経済新報社、1974年。
- ・山田史郎・北村暁夫・大津留厚・藤川隆男・柴田英樹・国本伊代『近代ヨーロッパの探求① 移民』ミネルヴァ書房、1998年。
- ・清水知久『近代のアメリカ大陸』講談社、1991年。
- ・ジャン・メイエル著、猿谷要監修、国領苑子訳『奴隷と商人』創元社、1996年。
- ・アンドレ・G・フランク著、西川潤訳『世界資本主義とラテンアメリカ—ルンペン・ブルジョワジーとルンペンの発展—』岩波書店、1978年。
- ・G. M. ホームズ著、矢口孝次郎監訳『英・米比較経済史』ミネルヴァ書房、1979年。
- ・和田俊二『熱帯の開拓と移民—熱帯アメリカ開拓史上における労働力気候適応の研究—』風間書房、1977年。
- ・米川伸一『概説イギリス経済史』有斐閣、1990年。
- ・Sidney W. Mintz, *SWEETNESS AND POWER THE PLACE OF SUGAR IN MODERN HISTORY*, Penguin Books, 1986。